論文の内容の要旨

論文題目　　老いと死をめぐる想像力

――「棄老」「ぽっくり信仰」「お供え」「墓参り」の習俗を通して――

氏名　　佐々木　陽子

➢　問題意識――なぜ習俗に着目するのか

本論文では、4 つの習俗（「棄老」「ぽっくり信仰」「お供え」「墓参り」）に依拠し、「老いから死」への道程に踏み入ることの受容や葛藤、そして「この世」の生者にとっての「あの世」の死者との関係を取り結ぶ有り様の考察を試みる。また、これらの習俗に絡む今日的問題にも光をあてる。研究方法において中心となるのは調査であり、聞き取り調査・調査票を用いた調査・現地調査などを全国規模で実施している。

習俗は、非科学的で非合理的に映るであろうが、合理だけでは割り切れない「老い」や「死」の問題を考えるに際し、習俗的想像力は理論や思想とは異なったレベルで視界を切り拓くと考える。習俗に着目するのは、1 つは、近代科学の医療は人間の寿命を延ばしてはきたが、死後世界を扱わない。また、老いて労働生産性から脱落し、「老いから死へ」歩みだしたことを自覚する時の混沌とした思いを扱うこともない。だが、習俗は「老い」や「死」を前にしての不安や葛藤を抱え込んだ人々の実感や本音を掬い上げようとする。いま 1 つには、他者の「死」を外在的に見ることはあるが、己の「死」を見ることはない。自分は死なないような錯覚、つまり「不死性の幻想」の中で我々は日常を生きている。一方では死の「絶対的不可知性」を了解しながらも、他方では想像力によって多様な「あの世」観が生み出されて

いる。習俗では「あの世」が日常世界に入り込み、死者供養を通じて死者が応答してくれると想定され、生死の境界の越境が不可能とはみなされない。

- **4つの習俗の位置づけと「あの世」**

序章では、本論文が扱う4つの習俗の関係を、サムナーやデュルケームの研究を踏まえ、4つの習俗に内在する「あの世」を媒介に、習俗行為が個人的なものか集団的なものか、死者の世界が問題なのか生者の世界が問題なのかという2つの軸を用いて、4つの習俗を4象限にわりあてることで、4つの習俗の相互の関係を提示している。死後世界の「あの世」観は、今日の日本各地にもみられ、殊に沖縄の「常世観」と呼ばれるあの世観では、「再生の観念」で死が捉えられ、こうした「あの世観」は、R.エルツが調査対象としたインドネシアなどの未開社会の「あの世観」に通じる。死は連続的儀礼によって長い時間をかけて受容され、最終の儀礼の完了をもって霊魂は死者の国へ向かうとされる。こうして生者の社会も再生をとげる。

4つの習俗のどれにも聖地としての「あの世」が存在しているとの「信念」が内在している。デュルケームの宗教を定義づける3要素「信念」「儀礼」「教会」のうち「信念」と「儀礼」は、これら4つの習俗に共有されているといえようが、「教会」（キリスト教など既成宗教に限定されない、道徳的共同社会）は想定されない。だが、お盆やお彼岸などの「墓参り」に「教会」的なるものが緩やかながら看取されよう。墓地に集う人々の間では、墓石に水かけをし花を活けるなどの儀礼的行為が共有される。お盆などに賑わう墓地空間を鳥瞰的視点に立って眺めれば、「教会」的なるものが姿をあらわす。墓碑は死者の情報を我々に与え、死者とその墓参者の関係へと想像力を膨らませることで、己と他の墓参者とが似た境遇にあることを思うとしたら、そこには緩やかながら統合や連帯が垣間見られよう。

- **4つの習俗の概要**

第1章の「棄老」については、民俗学と文学の2つのアプローチを用いて比較検討する。民俗学的アプローチでは、葬制（両墓性や風葬など）と「棄老」を混同させているとして習俗としての「棄老」を否定するのに対し、文学的アプローチでは、「棄老」が習俗であることを前提に舞台装置が組まれ、ストーリー（ここでは『楢山節考』『蕨野行』『デンデラ』の3作品を扱う）を展開している。

第2章の「ぽっくり信仰」については、全国各地の40ヶ所以上の関連施設の現地調査や、寺の住職や地域住民の方々からの聞き取り調査も実施した。前半では現地調査のほか、3つの死生観（土俗的死生観・宗教的死生観・科学的死生観）の比較を通して、「ぽっくり信仰」

を土俗的なるものとくくる。後半では西日本の別称である「嫁いらず信仰」（義父母がぽっくり逝けば介護嫁は不要との意味）に焦点をあてる。介護は嫁がするものとされてきた歴史が存在し、自治体単位で「介護嫁」「孝行嫁」表彰がなされてきたが、嫁による介護の無償労働をめぐるジェンダー絡みの問題と表裏の関係にある。

第 3 章では、「お供え」をテーマとする。不在の死者への食である「お供え」、不在の生者への食である「蔭膳」などについて、これらの習俗行為の経験者 75 名に調査協力いただいき、その結果に考察を加えている。3 分の 1 もの調査協力者が、「お供え」に際し、死者に声掛けをしているとのことであった。地方の 80・90 歳代の方々からは、戦争と関りのある呪法的「蔭膳」の話をうかがった。

第 4 章では、「お供え」同様の死者供養としての「墓参り」をテーマとする。全国各地の多様な墓地 300 ヶ所余りの現地調査が中心となるが、各地での聞き取り調査も実施した。現地調査や聞き取り調査の実施により、死者の空間として括られてきた墓地の多様な問題や変容を知りえた。日本の一部の「墓前飲食」については、青森県平内町から実写した DVD をいただき活用した。墓の変容は地域社会や家族の変容を映し出しており、地縁や血縁をこえていく合葬墓の増加が際立っている。

終章では再度 4 象限図式によって、４つの習俗相互の関係と習俗を扱ってきたことの意義を再確認した。習俗は非科学的に見えるが、長い時間をかけて培われてきた死をめぐる想像力であり、死への恐怖、残された生者と死者との関係の中で、それらを取り持つように４つの習俗が存在していることを図式を用いて確認し、「老い」や「死」を前に、科学や医療がどんなに発達しても代替できない、人々の本音や実感としての不安や寂しさを慰撫する機能を持つと捉える。

- **習俗が投げかける問題**

「棄老」が想起させる老人の「労働生産性からの脱落」という言葉は、能率至上主義の現代社会においても親和性を見いだすことができよう。今日、施設や病院に預けっぱなしで高齢者を棄て置くことも起こっており、こうした事件を新聞記事は「現代の姥捨て」「現代版棄老」などと表現し報道している。老人の尺度としての「労働生産性からの脱落」は、今日も有効であるといえようが、逆に老いてもなお働かねば生活が成り立たない現実も可視化しており、こうした老人の実態を、棄老文学（『蕨野行』）が映し出している。

「ぽっくり信仰」では、安楽往生の祈願理由に「家族に迷惑をかけたくない」があげられている。「老い」の後にありえるはずの介護の時間を否定した介護忌避のスタンスをとって

いる。介護で家族に迷惑をかけたくないとの願いに、介護者が介護放棄をするかもしれないとの被介護者の不安や恐怖を隠蔽させているなら、「迷惑をかけたくない」との言葉は、屈折した不安や恐怖の言い回しと言えなくもあるまい。

「お供え」では、親しい死者が手の届かない所に旅立ったという現実を受容しつつも、自身のなかで忘却せずに生かし続けていきたいとの思いも存在し、こうした死者への多様な思いの交差地点に「お供え」は位置づけられる。食という生きる上で最も基本的行為を共有する擬制による死者との交信といえよう。

「墓参り」も「お供え」同様、死者供養の習俗であるが、不可視な死者が生者のなかに生き続けていることが看取される。だからこそ、「あの世」の死者との応答可能性、「この世」と「あの世」の越境可能性を信じ込み受容していると捉えられる。「墓参り」習俗で取り上げる墓の変容は、例えば、家墓の減少、脱墓石化（コンピューター管理の納骨堂、合葬墓、樹木葬、散骨など）の流れなど墓の選択肢の拡大からも明らかである。今日の合葬墓の著しい増加は「血縁とは何か」との問いを投げかけてくる。また、倒壊した無縁墓を前にして、忘却された死者の有り様も見て取れる。墓の変容は、家族や地域社会の在り方の変容を語る。

死後世界の「あの世」は、未開社会から今日に至るまで存在し続け、本論文で取り上げた習俗も、「あの世」を死者の世界として位置づけてきた。本論文で扱った習俗には、「ぽっくり信仰」などのように呪術的なものもあり、その非科学性が明白ながら、「安楽往生」のために神仏などにすがりつこうとする心性に、老いて充分な介護が受けられないのではないかといった不安や恐怖が見えてくる。死者供養の習俗を通して、情愛の対象の死者は、時間を経ても記憶の中に生き「かけがいのなさ」がむしろ増幅することすらありえよう。こうした内発的な力が、これら習俗を延命させてきたといえようが、習俗の延命には、社会的な拘束力としての世間体や利便性といった外発的な力も関わっていると考える。ここ 50 年間で宗教は衰退傾向にあるが、「あの世」の存在を信じる人は倍増しているとの公的データがあり、世俗的な「あの世」としてその存在は今日も信じられている。老いて死ぬことの恐怖や不安、つまり人間の弱さをあるがままに受容するからこそ、すがる心性がめばえるのであろう。習俗的想像力は、そうした弱さをさらけ出す人間像を受容することで、人間の実感や本音を掬いだそうとする。

「老い」や「死」にまつわる実感や本音は、科学や合理に吸収しきれない余剰を孕み、学問知と実感知の乖離は避けて通れない。だからこそ習俗的想像力が掬い上げる力を発揮すると考える。